
腐。

フェンリル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腐。

【Zマーク】

N6711D

【作者名】

フ・ンリル

【あらすじ】

腐女子でオタクな少女、園崎詩。しかし、その正体は・・・。

ふりふりーぐ

「離せつ・・・・・離せみおつーーー！」

「戻れないのか？もつ・・・日常！」

「戻れるわけつ・・・なにだらつーーー！」

。彼の手が優しく俺に導いてくれるのに、俺はその手を突き放す・・・

「復讐か」

静かに、彼の口から発せられる言葉。

「つ

まさか・・・分かつっていたのか？

なのに・・・あんなに優しくしてくれたのか？

「お前は生半端すぎる。

・・・死ぬぞ、さつと」

「死なねえし、殺やれたりもしねえよーーー！」

「嘘。お前は死ぬ

「何でだよ・・・、何故そんな風につ

「復讐を果たしても、お前は罪悪感でいっぱいになる」

「喋つてこの途中で、彼は呟つと言つた。

「罪悪感……？そんなの……あるわけねえだろー……。」

「う……じゃあ、」

一瞬彼は田を地面に向け、すぐに俺の田を見つめる。

「じゃあ、何で泣いている？……。」

「え……。」

氣付かなかつた。

さつきから、田から涙が溢れて地面が濡れていふこと二三秒。

何故泣く必要がある。

どうして？

涙なんて、子供の頃に枯れ果てたハズなのに。

「泣いて……る……？」

「お前は、アイツを殺したいんじゃない。
確かに、罪は消えない。一生な。

でも……罪はまだ償える、手遅れでも何でもないんだよ……。」

「…」

アイツの笑顔。

アイツの怒った顔。

そして 僕の大事な人々を殺したときのアイツの顔。

思い出したとき、嘘だと思った。

ありえない、と。

「つぐ・・・なえる・・・つみ・・・」

もつ、言葉など滅茶苦茶。

「 行こう、アイツの所に」

「え・・・」

「まだ間に合ひつ・・・急げ」

そう言って彼は・・・俺に手を差し出した。

「なつ」

辛いはずなの。」「

苦しむはずなの。」「

混乱しているはずなのに。

親友同士が、敵だという事実に。

中立の立場で何を思う？

一体何を

・・・

「・・・・」

沈黙。

一瞬だったかも知れない。

それとも、もの凄く長い時間だったかも知れない。

俺は・・・ゆっくりと、

彼の手を握った

+ ぼくらの孤独 + - - - 次回、ついに決着？！

「どうなっちゃうんだろー、この展開！—
始めはあんなにほのぼのだったのにイ・・・
」の差はまさしくあれだね、ひ。らしのなく頃にレベルだよー

「ロハベリで騒がないで・・・迷惑」

「優^{ゆう}、」のあとアーメイ と、ヒルの なに行ひ

「詩^{ウタ}・・・今度は何買ひの？」

「B」「同人誌と、B」「小説～」

「・・・・・」の腐女子め・・・・・

「てへひ」

「可愛いくない」

「優つたら、クールすぎへ、さあさあ行ひ行ひ」

「・・・むう」

さてさて、このクールな女の子は『渡部優』

母は書道家、父は国會議員という何か絵に描いた様なお嬢様。

家は和風、私服も和風系が多いという、結構凄い女の子であります。

そして、私は『園崎詩』

私の家族はまあ、あとで分かるか。

分かる人には分かるのですが、私は俗に言つ『腐女子』なのです。

え？ 腐女子って何かって？

婦女子をもじつた言葉で・・・そつ・・・男同士のLOVE が好きな女子達の事です。

簡単にいふと、B^{ボイスラブ} 分かったかい？ YO

まあ、私なんかまだぬるい方で、

世の中には私なんかよりもっと凄いヨタクだつていっぱいいるよー。
・・絶対。

とまあ、自己紹介している間にも買い物が終了。

「詩、急がなきゃヤバイのでは？」

「あつ・・・本当ーーんじやーー」

「ぱいぱい」

ウチの門限は厳しい。

破つたら、家には入れてくれるけど・・・色々嫌だ。

なぜならば。

こつそり裏口から入り、自分の部屋に買った同人誌を投げ込む。

そして、再び表から入る。

そして

「お帰りなさいませ、お嬢様！」

20人程のメイドやら執事喫茶に行かなくともこの光景・・・。

メイド喫茶やら執事喫茶に行かなくともこの光景・・・。

そう。

私は、旧財閥のお嬢様です。

嫌々ながら。

「外はお寒いでしょ、ココアをどうぞ」

「ありがとうございます」

「今日は主人がご在宅です。
夕飯は何が食べたいですか？」

「何でも良いよ」

「お嬢様、これをお掛けください。
肩が冷えでは風邪を引いてしまいます」

「うん、ありがとうございます」

……。

……私……もしかして一般人と違う次元で生きてる?

と、最近思い出した。

だつて両親と一緒に公園で遊んだことないし、

遊びに行つたつて、ガードマンでいっぱいだつたし……

……遊園地は、貸切。

はああ~。

普通の女の子みたいな生活送つてみたいのにい。

「詩。帰つていたの？」

「母様つ・・・ただいまあ」

母の格好はトイレビツやつですかね?と聞きたくなるぐらいこの着物だ。

何回か着たことがあるナビ、お腹痛いし、ベランダ行きました。

たから着物にかなう苦手だ

「今田はお父様がいるんでしょ、久々だねえ、一緒にご飯食べるの?」

— そ う ねえ

今田ぐらには私が作ってもいいかしら?」

「え」

「何ヶ月ぶりでしょう、

「駄目」

ちなみに、母の弱点は

料理。

芸術ともアートともいえる素晴らしい料理を作る。

ただし、食べて普通に過ごせるのは、異様な舌の持ち主か、死体か。

「もつもつ料理人がいつぱい作ってるしつ！」

「そりゃ……残念ねえ……」

あ、あと一つ。

母は異様な舌を持っているのです。

なので、料理には口ひつるさい割に、自分の料理を平氣で喰えるスーパースター。

「さ、詩も早く準備をしてらっしゃい」

「はいはーい」

腐女子で旧財閥のお嬢様で貧乏人の生活に憧れる私。

それって貪欲ですか？

それってただの嫌味ですか？

だれか。

だれか、私の生きる道を教えてください。

ねえ

誰か

・・・・・。

♪ルルルーベ（後書き）

多分もういいやうに追加すると重いので止めてしまおうがこします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6711d/>

腐。

2010年11月15日07時34分発行